



題字 井口 文章  
再刊 第238号  
印刷・発行  
錦城高等学校新聞  
委員会

みんなでつくる  
錦城高校新聞

(特集)全国高等学校総合文化祭  
優秀校東京公演



宮城県のゆるキャラ むすび丸

# 伝える 国立劇場の夏

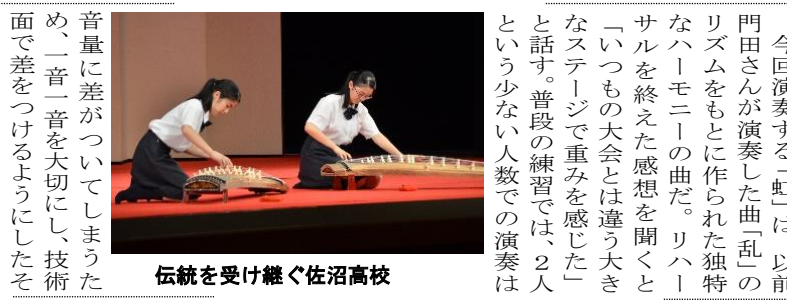
## 第28回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演特集

今年で28回目を迎えた全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演。この夏、みやぎ総文祭を飾った若者の力がこころで再び発揮された。

一音一音を大切に  
宮城県登米市にある佐沼高校の箏曲部は部員数5人で、

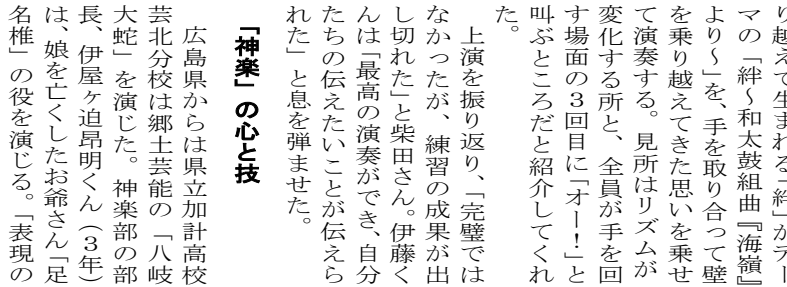


1日目OPは町田工業・第四商業・日本美術・川村学園の4校合同フラダンス



伝統を受け継ぐ佐沼高校

今年演奏する「虹」は、以前門田さんが演奏した曲「乱」のリズムをもとに作られた独特なハーモニーの曲だ。リハーサルを終えた感想を聞くと「いつもの大会とは違う大きなステージで重みを感じた」と話す。普段の練習では、2人という少ない人数での演奏は音量に差がついてしまったり、一音一音を大切に、技術面で差をつけるようにしたそ



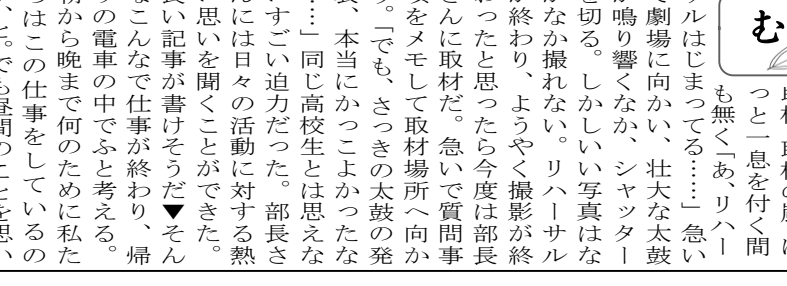
見どころは全員が「オー！」と叫ぶところ

愛知県から来た日本福祉大学付属高等学校の伊藤敏祐くん(3年)、柴田葉奈さん(3年)にお話を伺った。総文祭での最優秀賞は16年ぶりで、支えてくれた人たちに一番わかりやすい結果で恩返しできた嬉しいう。本公演ではここに来られな



加害者の体験をしてほしい

奥深さに苦悩することもあるが、伝統を壊さないように演じたい」と語った。埼玉県から来た県立向陽高校は、竜史作「文化祭大作戦」より吉澤信吾潤色「HEAVY」のこの作品は文化祭のクラス劇で「ロミオとジュリエット」を上演するまでの高校生を描いたものだ。劇中では実際に「ロミオとジュリエット」の一部が演じられている。



表情豊かに全身全量で演技する

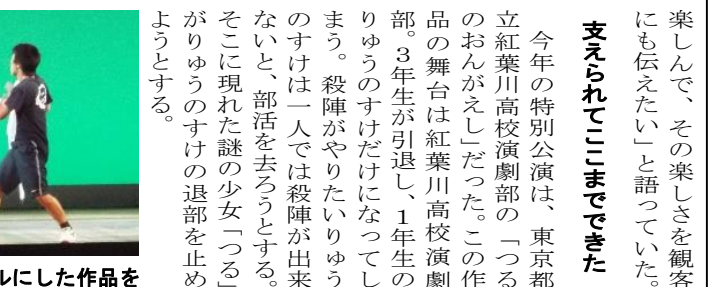
部長の武田龍之介くん(2年)に演劇のどんなところが楽しいか聞くと、仲間と協力し合えるところが好きだ。練習がとて多すぎて大変だったという。そのとき3年生に救われたそう。「今度は自分が先輩として後輩を助けてあげたい」と話す。

うだ。これからは、今回演奏した「虹」のように音の余韻を大切にしている曲をまた演奏したい、と門田さん。また、2人と5人では演奏できる曲も変わるの、色々な曲を演奏してみたい、とも話してくれた。



迫力満点の「八岐大蛇」を演じる

今年で28回目を迎えた全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演は、28年前から毎年、国立劇場で行われている公演です。文化祭のインターハイとも呼ばれる「全国高校総合文化祭」で演劇・日本音楽・郷土芸能3部門から選ばれた優秀校12校が、2日間にわたり国立劇場で演奏・演技を披露します。



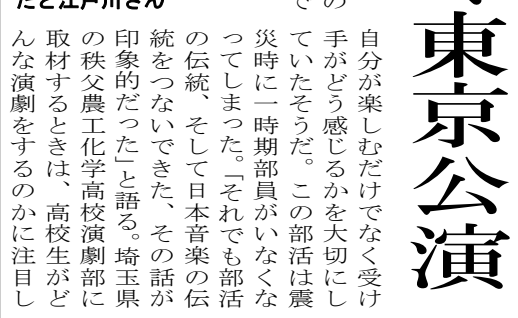
自分たちをモデルにした作品

沖縄県から来た県立向陽高校は、竜史作「文化祭大作戦」より吉澤信吾潤色「HEAVY」のこの作品は文化祭のクラス劇で「ロミオとジュリエット」を上演するまでの高校生を描いたものだ。劇中では実際に「ロミオとジュリエット」の一部が演じられている。

朝9時、慌ただしく準備が進むなか、楽屋に入る。話し合いを済ませるとその後は取材、取材、取材の嵐。つと一息を付く間もなく「あ、リハールはじまってる……」急いで劇場に向かい、大きな太鼓が鳴り響くなか、シャッターを切る。しかし写真がなかなか撮れない。リハールが終わったと思ったら今度は部長さんに取材だ。急いで質問事項をメモして取材場所へ向かう。「でも、さっきの太鼓の発表、本当にかっこよかったな……」同じ高校生とは思えないくらい迫力があった。部長さんには日々の活動に対する熱い思いを聞くことができた。

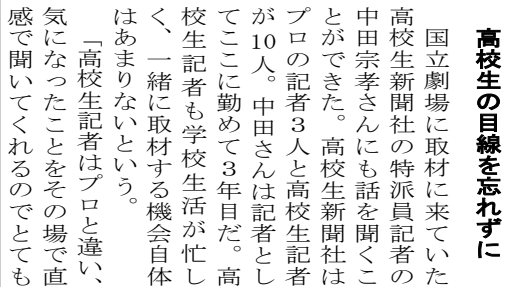
# プロの記者に聞く東京公演

完成度はプロ顔負け  
今回の東京公演に取材に来ていた朝日新聞東京本社文化記者江川夏樹さんに取材することができた。普段は演劇中心の取材をしていて、俳優や演出家に話を聞くことも多いという江川さん。東京公演はプロ顔負けの完成度だ



高校生の姿が印象的だと江川さん

自分が楽しむだけでなく受け手がどう感じるかを大切にしていたそう。この部活は震災時に一時期部員がいなくなってしまう。それでも部活の伝統、そして日本音楽の伝統をつないでいた。その話が印象的だったと語る。埼玉県秩父農工化学高校演劇部に取材するときは、高校生がどんな演劇をするのかに注目し



「高校生記者を頼りにしています」

国立劇場に取材に来ていた高校生新聞社の特派員記者の中田宗孝さんにも話を聞くことができた。高校生新聞社はプロの記者3人と高校生記者が10人。中田さんは記者としてここに勤めて3年目だ。高校生記者も学校生活が忙し



登場人物の感情の機微を表現

頼りにしています」と中田さんは笑う。日々の取材で心がけているのは高校生の目線を忘れないこと。高校生に取材をするときは「挨拶と礼儀が大事」「先輩と後輩の仲が良い」という一見単純な答えが多いという。しかしその言葉に至るまでの経緯まで細かく聞くと、違いが現れることが多い。それぞれ違うストーリーがある。それを引き出すのが役目です」と記者として仕事のコツを伝えてくれた。(湊・鶴)



公演ニュース発行の経緯

8年前から公演ニュース発行のいきさつを昭和第一学園高校元教諭の松井孝二さんと、錦城高校元教諭の松井巖さんに聞いた。今年で第10号になる公演ニュースでは様々な人にスポットライトを当てている。両先生は「取材をする生徒にとってもいい経験になるし、取り上げられる方にとっても光が当たることでやりがいになるだろうと思います」と意義を語った。公演の裏方で活躍する人達に注目だ。

笑んだ。公演を終えた感想を聞くと「とても楽しかった。100%中の120%の出来栄でできた力強く語る。ひとりりや出来なかつた振り返る武田さん。人との絆の大事さを実感したという。色々なものに支えられてきたから、ここまでやるのが出来ました」と話す武田さんの瞳には涙がたまっていた。「先輩になったのでこのような劇を後輩とまた作り出したいです」とこれからのことについて語った。



# 息の止まる感動を

静岡県立三島北高校 箏曲部部長の杉山沙里さん(3年)は「リハーサル後「終わった時に息が止まるような感動を味わってほしい」と語った。今回3年生で演奏する「箏のための組曲」では、より表現を豊かにするために、部員が物語を考えたと。人間に恋をしてしまい、魚に止められるも人魚は聞かず、最後には泡に変わってしまうという物語だ。

練習は週に6日、平日は3時間、休日は6時間練習している。練習の様子について「おしとやかと思われがちですが、みんな個性が豊かです。練習は体力を使いますが楽しいです」と頷きながら話した。3年生は16人いるが、例年より人数が少ないという。「人数が少ない中で、最後は2人は、後輩たちにも国立劇場に出演してほしい」と微笑んだ。(巴・碧)

## 物の事を考えて表現豊かに



国立第一高校演劇部は、「白紙提出」というオリジナルの劇を演じた。夏休み最終日、勉強会をしようと集まった高校

# 夏の終わりの『白紙提出』

日生5人組が、ふとしたことから「気持ち悪い」互いのコンプレックスに気づき、自分たちのために「色々な感情をもつ役だからこそ、それを表現するのが難しかった。これからは課題は沢山あります」と真剣な様子で話した。実は今回演じたのは第16稿。1年前から同じ作品に手直しを加えながら県大会、全国大会、そしてこの優秀校公演まで来ることができた。

1つ上の代がおらず手探りで進むしかなかったが、磯前さんは「その分同じ代の絆は深まりました。顧問の豊田先生には本当に助けていただきました」と話した。(湊・巴)

## テンポ良くセリフが進められていく

錦城高校48回生の久保田敬子さんは、現在国立劇場の映画や舞台のパブリックを制作する編集企画室で働いている。パブリックは映画や音楽専門の方に文章を書いてもらい、編集して作るという。仕事をしながら楽しかったことは、パブリックが完成し配られるときだ。「みなさん最後は久保田さんへこれから国立劇場の伝統芸能を保存して浸透させていくことを意識していきます。伝統芸能を見たことのない人にも、文章を通して魅力を伝え、面白く思ってもらいたいですね」と話した。(英)

## 高校生に元気をもらえます

1日目の公演後に会場の外にいた遠藤琢矢さん、竹田陽介さん、仲長康行さんの3人が話を聞いた。毎年夏は東京公演を楽しみにしている話だ。そのほか千葉県から来た遠藤さん、東京公演に来るのはこれが7年目という。「高校生はエネルギーがすごい。元気がもらえる。高校野球だけじゃなく、こんな素晴らしいものがある。演劇などで、高校生が答えのない問題を解決しようと頑張っている姿を見ると、自分自身も頑張ろうと思える」と話した。

## 舞台裏で活躍する卒業生

錦城高校48回生の久保田敬子さんが、現在国立劇場の映画や舞台のパブリックを制作する編集企画室で働いている。パブリックは映画や音楽専門の方に文章を書いてもらい、編集して作るという。仕事をしながら楽しかったことは、パブリックが完成し配られるときだ。「みなさん最後は久保田さんへこれから国立劇場の伝統芸能を保存して浸透させていくことを意識していきます。伝統芸能を見たことのない人にも、文章を通して魅力を伝え、面白く思ってもらいたいですね」と話した。(英)

## 観客インタビュー

2日目の公演を見にきていた、埼玉県立越谷北高校の演劇部に所属している平田一貴くん(2年)と波多野湧くん(2年)は、今度、社会性のある劇をするので、参考にするために来たという。どの劇も全国レベルでクオリティが高く、波多野くんは「同じ役者として、演技方や声の出し方など見習うところが多くあって、自分たちの劇に活かしたいです」と話した。一番印象に残っているのは埼玉県立秩父農工科学高等学校の劇で、毎回違う演劇をして、何度見ても飽きることがない。

## 都立杉並高校の宮澤のかさん(3年)と岩瀬真子さん(2年)

は、今回の東京公演で受付係を担当した。主な仕事は、招待された方に座席番号が書かれたカードを渡すことだ。「受付というのはお客さんが最初に見るところなので、どんな状況でも笑顔でやさしいようにしています」と2人は真剣に話した。また、お客さんが「お疲れさま」と声をかけてくれるときに、やって良かったと感じるそうだ。ただ、お客さんに自分が把握しきれてないことを聞かれたときは対応に困ってしまうという。「わからないことがあったら先生に聞くのですが、それでもお客さんを待たせてしまうため申し訳ないです」と宮澤さんは話す。次に向けて2人は、「混乱してしまう場面があったので、反省点を活かし、もう少し落ち着いてお客さんに接していきたいです」と語った。(蘭)

## 支える人々

会場2階では呈茶を行っていた。担当する高校の一つである蒲田女子高校茶道部の野川桂織さん(2年)、田邊羽純さん(2年)、田村愛衣香さん(2年)に話を聞いた。「のんびりした空間で、あたたかい時間をすごせるのが茶道の魅力」という田村さん。田邊さんと田村さんが茶道を始めたのは、高校の茶道部に入部してから。野川さんは、幼稚園の授業で茶道を習ったそうだ。「しばらくやってなかったのですが、高校に入ってから茶道部に入部しました」と笑顔を見せる。田邊さんは日本文化や作法を学べるのが魅力だ。「高齢の方からお子様まで交流できるのは茶道ならでは」とも語った。案内する際にはお客様を視察し、小さい子には少しぬるめのお茶を出したり、足の悪い方の荷物を持って席まで案内したりと、相手が必要としていることを見極めるように心掛けたそう。3人は茶道の所作は難しいと話すが、お茶を飲んだ人に「おいしい」と言ってもらえると嬉しくなりと微笑んだ。(加)

# 大人顔負けの鬼剣舞を披露

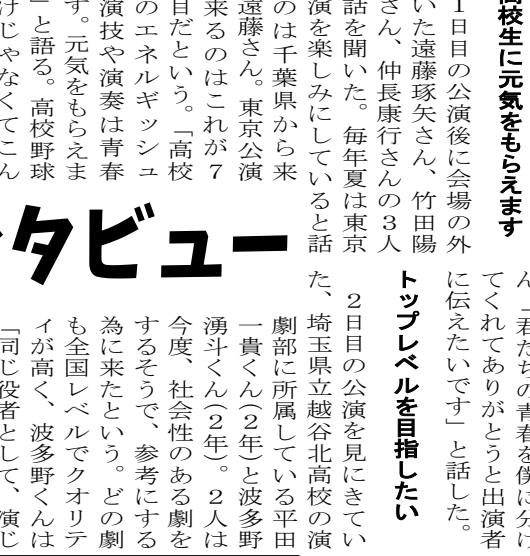
郷土芸能の「鬼剣舞」を披露する岩手県立北上翔南高等学校の鬼剣舞部部長の小原夏海さん(3年)に話を聞いた。正式には70分間の剣舞だが、総合文化祭では時間制限があるため、13分間になるように構成を工夫したという。小原さんは小学校4年生の時に初めて見た「鬼剣舞」に心を奪われ、高校から習い始めたという。地元の夏祭りでは毎年鬼剣舞を披露し、高校生らしい鬼剣舞を見せたいという機会と

追力ある動きで観客を魅了する。本番後「みんなで踊って良い演武になったと思います。鬼剣舞を踊る団体は大人がほとんどで、高校生団体は私たちがただなので、元気がいいの若々しさをお客さんに伝えられて良かった」と話した。小原さん(3年)は「これから後輩が鬼剣舞の伝統や深さを、意味を受け継いでいってほしいです」と後輩にメッセージを送った。(天・英)



2日目のオープニングは、西山学院高校による宮城蔵王の「雷太鼓」(上)、そして三宅島から明星学園の「神着神輿太鼓」(下)

# 全国の魅せる演舞、集う



## 高校生に元気をもらえます

1日目の公演後に会場の外にいた遠藤琢矢さん、竹田陽介さん、仲長康行さんの3人が話を聞いた。毎年夏は東京公演を楽しみにしている話だ。そのほか千葉県から来た遠藤さん、東京公演に来るのはこれが7年目という。「高校生はエネルギーがすごい。元気がもらえる。高校野球だけじゃなく、こんな素晴らしいものがある。演劇などで、高校生が答えのない問題を解決しようと頑張っている姿を見ると、自分自身も頑張ろうと思える」と話した。

## 舞台裏で活躍する卒業生

錦城高校48回生の久保田敬子さんが、現在国立劇場の映画や舞台のパブリックを制作する編集企画室で働いている。パブリックは映画や音楽専門の方に文章を書いてもらい、編集して作るという。仕事をしながら楽しかったことは、パブリックが完成し配られるときだ。「みなさん最後は久保田さんへこれから国立劇場の伝統芸能を保存して浸透させていくことを意識していきます。伝統芸能を見たことのない人にも、文章を通して魅力を伝え、面白く思ってもらいたいですね」と話した。(英)

## 観客インタビュー

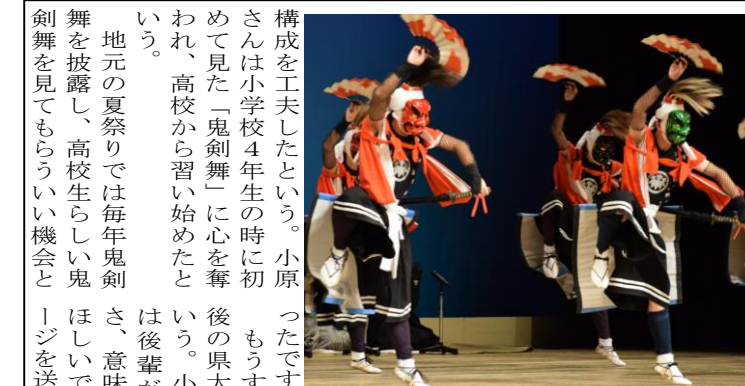
2日目の公演を見にきていた、埼玉県立越谷北高校の演劇部に所属している平田一貴くん(2年)と波多野湧くん(2年)は、今度、社会性のある劇をするので、参考にするために来たという。どの劇も全国レベルでクオリティが高く、波多野くんは「同じ役者として、演技方や声の出し方など見習うところが多くあって、自分たちの劇に活かしたいです」と話した。一番印象に残っているのは埼玉県立秩父農工科学高等学校の劇で、毎回違う演劇をして、何度見ても飽きることがない。

## 都立杉並高校の宮澤のかさん(3年)と岩瀬真子さん(2年)

は、今回の東京公演で受付係を担当した。主な仕事は、招待された方に座席番号が書かれたカードを渡すことだ。「受付というのはお客さんが最初に見るところなので、どんな状況でも笑顔でやさしいようにしています」と2人は真剣に話した。また、お客さんが「お疲れさま」と声をかけてくれるときに、やって良かったと感じるそうだ。ただ、お客さんに自分が把握しきれてないことを聞かれたときは対応に困ってしまうという。「わからないことがあったら先生に聞くのですが、それでもお客さんを待たせてしまうため申し訳ないです」と宮澤さんは話す。次に向けて2人は、「混乱してしまう場面があったので、反省点を活かし、もう少し落ち着いてお客さんに接していきたいです」と語った。(蘭)

## 支える人々

会場2階では呈茶を行っていた。担当する高校の一つである蒲田女子高校茶道部の野川桂織さん(2年)、田邊羽純さん(2年)、田村愛衣香さん(2年)に話を聞いた。「のんびりした空間で、あたたかい時間をすごせるのが茶道の魅力」という田村さん。田邊さんと田村さんが茶道を始めたのは、高校の茶道部に入部してから。野川さんは、幼稚園の授業で茶道を習ったそうだ。「しばらくやってなかったのですが、高校に入ってから茶道部に入部しました」と笑顔を見せる。田邊さんは日本文化や作法を学べるのが魅力だ。「高齢の方からお子様まで交流できるのは茶道ならでは」とも語った。案内する際にはお客様を視察し、小さい子には少しぬるめのお茶を出したり、足の悪い方の荷物を持って席まで案内したりと、相手が必要としていることを見極めるように心掛けたそう。3人は茶道の所作は難しいと話すが、お茶を飲んだ人に「おいしい」と言ってもらえると嬉しくなりと微笑んだ。(加)



追力ある動きで観客を魅了する

本番後「みんなで踊って良い演武になったと思います。鬼剣舞を踊る団体は大人がほとんどで、高校生団体は私たちがただなので、元気がいいの若々しさをお客さんに伝えられて良かった」と話した。小原さん(3年)は「これから後輩が鬼剣舞の伝統や深さを、意味を受け継いでいってほしいです」と後輩にメッセージを送った。(天・英)



2日目のオープニングは、西山学院高校による宮城蔵王の「雷太鼓」(上)、そして三宅島から明星学園の「神着神輿太鼓」(下)

# 全国の魅せる演舞、集う



2日目のオープニングは、西山学院高校による宮城蔵王の「雷太鼓」(上)、そして三宅島から明星学園の「神着神輿太鼓」(下)

## 高校生に元気をもらえます

1日目の公演後に会場の外にいた遠藤琢矢さん、竹田陽介さん、仲長康行さんの3人が話を聞いた。毎年夏は東京公演を楽しみにしている話だ。そのほか千葉県から来た遠藤さん、東京公演に来るのはこれが7年目という。「高校生はエネルギーがすごい。元気がもらえる。高校野球だけじゃなく、こんな素晴らしいものがある。演劇などで、高校生が答えのない問題を解決しようと頑張っている姿を見ると、自分自身も頑張ろうと思える」と話した。

## 舞台裏で活躍する卒業生

錦城高校48回生の久保田敬子さんが、現在国立劇場の映画や舞台のパブリックを制作する編集企画室で働いている。パブリックは映画や音楽専門の方に文章を書いてもらい、編集して作るという。仕事をしながら楽しかったことは、パブリックが完成し配られるときだ。「みなさん最後は久保田さんへこれから国立劇場の伝統芸能を保存して浸透させていくことを意識していきます。伝統芸能を見たことのない人にも、文章を通して魅力を伝え、面白く思ってもらいたいですね」と話した。(英)

## 観客インタビュー

2日目の公演を見にきていた、埼玉県立越谷北高校の演劇部に所属している平田一貴くん(2年)と波多野湧くん(2年)は、今度、社会性のある劇をするので、参考にするために来たという。どの劇も全国レベルでクオリティが高く、波多野くんは「同じ役者として、演技方や声の出し方など見習うところが多くあって、自分たちの劇に活かしたいです」と話した。一番印象に残っているのは埼玉県立秩父農工科学高等学校の劇で、毎回違う演劇をして、何度見ても飽きることがない。

## 都立杉並高校の宮澤のかさん(3年)と岩瀬真子さん(2年)

は、今回の東京公演で受付係を担当した。主な仕事は、招待された方に座席番号が書かれたカードを渡すことだ。「受付というのはお客さんが最初に見るところなので、どんな状況でも笑顔でやさしいようにしています」と2人は真剣に話した。また、お客さんが「お疲れさま」と声をかけてくれるときに、やって良かったと感じるそうだ。ただ、お客さんに自分が把握しきれてないことを聞かれたときは対応に困ってしまうという。「わからないことがあったら先生に聞くのですが、それでもお客さんを待たせてしまうため申し訳ないです」と宮澤さんは話す。次に向けて2人は、「混乱してしまう場面があったので、反省点を活かし、もう少し落ち着いてお客さんに接していきたいです」と語った。(蘭)

## 支える人々

会場2階では呈茶を行っていた。担当する高校の一つである蒲田女子高校茶道部の野川桂織さん(2年)、田邊羽純さん(2年)、田村愛衣香さん(2年)に話を聞いた。「のんびりした空間で、あたたかい時間をすごせるのが茶道の魅力」という田村さん。田邊さんと田村さんが茶道を始めたのは、高校の茶道部に入部してから。野川さんは、幼稚園の授業で茶道を習ったそうだ。「しばらくやってなかったのですが、高校に入ってから茶道部に入部しました」と笑顔を見せる。田邊さんは日本文化や作法を学べるのが魅力だ。「高齢の方からお子様まで交流できるのは茶道ならでは」とも語った。案内する際にはお客様を視察し、小さい子には少しぬるめのお茶を出したり、足の悪い方の荷物を持って席まで案内したりと、相手が必要としていることを見極めるように心掛けたそう。3人は茶道の所作は難しいと話すが、お茶を飲んだ人に「おいしい」と言ってもらえると嬉しくなりと微笑んだ。(加)

## 呈茶

会場2階では呈茶を行っていた。担当する高校の一つである蒲田女子高校茶道部の野川桂織さん(2年)、田邊羽純さん(2年)、田村愛衣香さん(2年)に話を聞いた。「のんびりした空間で、あたたかい時間をすごせるのが茶道の魅力」という田村さん。田邊さんと田村さんが茶道を始めたのは、高校の茶道部に入部してから。野川さんは、幼稚園の授業で茶道を習ったそうだ。「しばらくやってなかったのですが、高校に入ってから茶道部に入部しました」と笑顔を見せる。田邊さんは日本文化や作法を学べるのが魅力だ。「高齢の方からお子様まで交流できるのは茶道ならでは」とも語った。案内する際にはお客様を視察し、小さい子には少しぬるめのお茶を出したり、足の悪い方の荷物を持って席まで案内したりと、相手が必要としていることを見極めるように心掛けたそう。3人は茶道の所作は難しいと話すが、お茶を飲んだ人に「おいしい」と言ってもらえると嬉しくなりと微笑んだ。(加)

